

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18730123  
 研究課題名（和文） 欧州共通農業政策成立の史的研究：欧州統合成立史の再検  
 研究課題名（英文） Historical Studies of the Formation of European Common Agricultural Policy: Re-examining for the History of European Integration in Formative Years  
 研究代表者  
 川嶋 周一（KAWASHIMA SHUICHI）  
 明治大学・政治経済学部・専任講師  
 研究者番号：00409492

## 研究成果の概要：

1950 年代に西欧各国で協議された農業統合交渉は、一度目の交渉（プールのヴェール交渉）の決裂の後、欧州経済共同体（EEC）の設立交渉であるローマ条約交渉において復活した。ローマ条約交渉の中で復活した農業統合は、加盟国の利害を包括する形で成立し、共同体における再分配構造の成立の契機となる。他方で、以後協議される具体的な共同体政策の制定過程の中で、コミットロジー手続きが定められ、農業統合のメカニズムは欧州共同体の統治構造の中に刻印されることとなった。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	270,000	3,270,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：欧州統合、EU、欧州統合史、共通農業政策、プールのヴェール、農業統合

## 1. 研究開始当初の背景

本科研費研究を開始した 2006 年は、通貨統合を果し東方に拡大したヨーロッパ連合（EU）が、フランスおよびオランダ両国における憲法条約批准交渉の破綻によって、統合をいかに進めていくのかが論議され始めた年だった。欧州諸国は、後戻りできない欧州統合というプロジェクトをいかに進めていくのかという「熟考の時期」を迎えていた。我が国でも、EU をモデルに、東アジア共同体構想が語られつつあったが、ヨーロッパ統

合の射程を考える際には、歴史的な視座が不可欠である。しかし、我が国の EU 研究の多数は現状の政策分析か経済分析に留まり、他方で戦後ヨーロッパ史は、欧州統合を歴史学の対象にするまでには至っていない。さらに、欧州統合の成立過程は、ECSC・EEC・EC・EU を直線的に結ぶ超国家的な制度発展史に単純化されている。そこでヨーロッパ統合の成立過程に関し、実証的な史的アプローチに基づく再検討作業に関わる研究に着手することにした。

## 2. 研究の目的

EU には、1952 年に成立した欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) と、1958 年に成立したヨーロッパ経済共同体 (EEC) という二つの機構的原点が存在する。1950 年代に誕生したこの二つの機構の間には、連続性と断続性の両側面が存在する。本研究の目的は、この時期における欧州統合成立史の再検討を行うことに加え、EEC 成立期に登場した統合メカニズムが、その後の欧州統合の発展形態に果たした影響をも考察することである。

具体的には、EEC における共通農業政策 (CAP) の史的成立の過程と要因を、EEC 成立以前の国際農業交渉を基点として、オランダ、西ドイツ、フランスの三国の国際交渉の分析を通じて明らかにすることを目的とする。

CAP 成立史研究を行う目的は、以下の三つに整理することができる。

第一に、農業統合の試みは 1950 年代に進められたが、農業はむしろ統合の試みでは傍流に思われていた。石炭鉄鋼や防衛と言った領域における統合の試みが統合の本流と思われていたが、しかし後に初の欧州共通政策として成立する農業政策がいかに試みられたのかを明らかにすることは、欧州統合成立過程を重層的に再検討することにつながる。したがって、欧州農業統合史の検討によって統合史の成立過程を重層的に理解することが可能になる。

第二に、CAP は、1940 年代後半以降幾度となく続いた、冷戦と欧州統合が交錯する多国間交渉の末に成立した政策であるので、CAP 成立史研究は、欧州統合成立期における外交研究と国内政治経済研究の結節点を形成することである。

第三に、農業分野は、二重の意味で欧州統合に独特の重みを与える政策分野である。それは第一に、EU の直接的な機構的出発点である欧州経済共同体 (EEC) における最初の共通政策となったこと、そして第二に、共通農業政策で培われた政策過程と共同体の行政統治メカニズムが、EEC が EU へと深化する際に、他の政策分野に波及していったことである。それ故、共同体成立期における統合メカニズムの生成と、成立後の統治メカニズムの発展を一つの射程に置くことで、欧州統合成立史の再検討は、成立過程で誕生した統治メカニズムが、いかにその後の統治構造に刻印されていくかを明らかにすることでもある。

このように本研究は、農業というフィルターを通して、欧州統合の成立過程を、政治外交と経済領域の二つの側面から再検討し、欧州統合の成立を再検討し、そして以後の統合の展開への刻印がいかなるものだったのか

を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、一次史料の重視、マルチアーカイブ、政治と経済の複合的なアプローチという三つの研究上の方法に基づいて進められた。第一の一次史料の重視に関しては、第二次大戦後の国際関係史研究においては、未公開の一次史料を基にした実証的な歴史学的アプローチが、欧州各国の研究では取り組まれており、本研究においても、このような一次史料を基礎として実証的な研究に取り組んだ。

第二のマルチアーカイブの方法については、本研究が国際農業交渉を研究対象にしていることから、取り扱う対象国家が、少なくともフランス、ドイツ、オランダの三カ国にわたることから必要とされる。この方法をとることで、これらの複数の外交文書をつき合わせながら、重層的な国際交渉の全体構造を明らかにする。

第三の政治と経済の複合的なアプローチの点に関しては、農業交渉は農業と言う国民経済上重要なセクターに関する経済統合交渉であるため、経済史的な分析が不可欠である。しかし同時に、本研究の最終目標が、農業統合がその後の欧州統合の統合メカニズムに与えた影響を考察するという政治学的な分析を行うことである。それゆえ、農業統合の分析は、以上のような政治と経済の複合的なアプローチに基づいて行う。

## 4. 研究成果

本研究の遂行結果、以下のような成果を得ることとなった。

第一に、1962 年に最終的な具体的規定の策定に至る農業統合のプロセスは、1950 年代における二つの国際農業交渉の経緯に大きく依存しているということである。すなわち、第一の交渉であるプール・ヴェール交渉における欧州大の交渉の結果、この交渉自体は各国の利害対立が激しく失敗に終わるものの、各国の農業統合に対する基本スタンスが明確になったことと、農業統合の問題点を可視化することに寄与した。第二の交渉であるローマ条約交渉では、参加国の対立が激しく、しかし実現に向けた具体的な取り組みがこの段階で合意されることで、58年に成立する欧州経済共同体の枠組みで、まず農業統合が最初に取り組みされる方向性が定められることとなった。

第二の成果は、農業統合を欧州統合の枠組みに取り入れることこそが、欧州統合のメカニズムそのものに大きな影響を与えたことを明らかにしたことである。ローマ条約成立

交渉において、農業統合と共通市場統合の兼ね合いが議論され、農業統合の概要が参加各国の利害を包括する形で定められた。それゆえ、農業統合は加盟国の利害の再配分的システムとして成立することとなった。

第三の成果は、農業統合の具体的政策となる 62 年の共通農業政策 (CAP) の策定過程において、後の欧州統合政策の特徴的な政策過程であるコミトロジー方式が確立したことを明らかにしたことである。このコミトロジー方式の確立により、欧州共同体は委員会と加盟国の両者が中心となる楕円形の政治的統治体として発展することとなった。

第四に、以上の様に、その成立過程が史的展開の末に誕生し、そして以後の統合構造に大きな影響を与えた農業統合成立のプロセスは、欧州統合の成立過程において決して傍流に過ぎなかったのではないことを明らかにした。つまり、農業統合のダイナミズムは、統合そのものを大きく左右し、石炭鉄鋼領域や安全保障の領域と合わせて、複合的に欧州統合を成立に導いていったのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 川嶋周一 「フランス外交の〈三つのサークル〉? ユーラフリック、アルジェリア、世界政策: 1958 年 9 月 5 日覚書の分析から」『日仏政治研究』第 2 号、2006 年、57-70 頁。査読あり
- ② 川嶋周一 「前を向きながら過去を遡ること/後ろ向きに未来の中に入ること—ヨーロッパ統合史研究の射程と課題に代えて」『創文』、第 499 号(2007 年 7 月号)、2007 年。5-9 頁。査読なし
- ③ 川嶋周一 「欧州共通農業政策の成立とヨーロッパ統合の政体化: コミトロジー・システムの成立・拡散の考察から」『政経論叢』76 巻第 1-2 号、2007 年。107-134 頁。査読あり
- ④ 川嶋周一 「比較・関係・制度 — 国境を超えた政治構造をいかに記述するのか」『創文』第 516 号(2009 年 1-2 月号)、2009 年、6-10 頁。査読なし。
- ⑤ 川嶋周一 「ヨーロッパ構築過程における共通農業政策の起源と成立 1950-1962」『政経論叢』第 77 巻 3-4 号、2009 年。239-297 頁。査読あり

[学会発表] (計 5 件)

- ① 川嶋周一 「欧州共通農業政策の成立とコミトロジー: 共同体政治過程へのテクノクラシー・ヨーロッパの埋め込みと政体化」2006 年度日本比較政治学会研究大会、自由企画 3 「経済政策形成過程における専門性の役割」立教大学池袋キャンパス、2006 年 10 月 7 日。
  - ② 川嶋周一 「ヨーロッパ統合から見た CSCE: 政治連合の模索とデタント、1969-1972」、2007 年度日本国際政治学会研究大会、部会 10 「デタントの再検討: CSCE をめぐって」、福岡国際会議場、2007 年 10 月 27 日。
  - ③ 川嶋周一 「独仏関係の政治的射程: エリゼ条約を超えて」、日仏交流 150 周年記念日仏シンポジウム (主催: 日仏会館、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、東京大学現代ヨーロッパ経済研究教育プログラム) 「欧州統合の半世紀と東アジア共同体」、東京大学駒場キャンパス、2008 年 4 月 18 日。
  - ④ 川嶋周一 「ヨーロッパ統合史のヒストリオグラフィーと 60 年代 (-70 年代) 研究の射程」、第 33 回慶應 EU 研究会、慶應義塾大学三田キャンパス、2008 年 5 月 24 日。
  - ⑤ 川嶋周一 「ドゴール外交とヨーロッパの構築」、第一回日仏会館人文社会系若手研究者セミナー、日仏会館、2008 年 10 月 12 日。
- [図書] (計 3 件)
- ① 川嶋周一 『独仏関係と戦後ヨーロッパ国際秩序: ドゴール外交とヨーロッパの構築 1958-1969』、創文社、2007 年。1-358 頁。
  - ② 遠藤乾 (編) 板橋拓己、戸澤英典、上原良子、細谷雄一、川嶋周一、橋口豊、鈴木一人 (共著) 『ヨーロッパ統合史』、名古屋大学出版会、2008 年。1-384 頁。
  - ③ 遠藤乾 (編) 板橋拓己、戸澤英典、上原良子、八十田博人、細谷雄一、川嶋周一、橋口豊、鈴木一人 (共著) 『原典ヨーロッパ統合史—史料と解説』、名古屋大学出版会、2008 年、1-804 頁。
- [産業財産権]
- 出願状況 (計 0 件)
  - 取得状況 (計 0 件)

〔その他〕  
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川嶋 周一 (KAWASHIMA, SHUICHI)  
明治大学・政治経済学部・専任講師  
研究者番号：00409492

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし